

3. 荒城の月

作詞土井晩翠・作曲滝廉太郎

一、春高樓(こうろう)の花の宴(えん)

巡(めぐ)る盃(さかずき)かげさして
千代の松が枝(え)わけ出(い)でし
昔の光(ひ)まいざこ

二、秋陣営(じんえい)の霜の色

鳴きゆく雁(かり)の数(かず)見せて
植(う)うる剣(つるぎ)に照(て)りそいし
昔の光(ひ)まいざこ

三、いま荒城の夜半(よわ)の月

替(かわ)らぬ光(あ)たがためぞ
垣(かき)に残(のこ)るはただ葛(かずら)
松(まつ)に歌(う)はただ嵐(あらし)

四、天上影(てんじやう)は替(か)ねど

栄(えい)枯(こ)は移(うつ)る世(よ)の姿(すがた)
写(うつ)さんとてか今(いま)もなお
嗚呼(ああ)荒城(あらか)の夜半(よわ)の月

4. 上を向いて歩こう

作詞永六輔・作曲中村八大

上を向いて歩こう
涙(なみだ)がこぼれないように
思い出(おもいで)す 春(はる)の日(ひ) 一人(ひとり)ぼっちの夜(よ)

上を向いて歩こう
にじんだ星(ほし)をかぞえて
思い出(おもいで)す 夏(なつ)の日(ひ) 一人(ひとり)ぼっちの夜(よ)

幸せ(しあわせ)は 雲(うみ)の上に

幸せ(しあわせ)は 空(そら)の上に

上を向いて歩こう
涙(なみだ)がこぼれないように
泣(な)きながら 歩(あ)く 一人(ひとり)ぼっちの夜(よ)
思い出(おもいで)す 秋(あき)の日(ひ) 一人(ひとり)ぼっちの夜(よ)

悲(かな)しみは星(ほし)の影(かげ)
悲(かな)しみは月(つき)の影(かげ)

上を向いて歩こう
涙(なみだ)がこぼれないように
泣(な)きながら 歩(あ)く 一人(ひとり)ぼっちの夜(よ)

5. 川越を歌うオリジナル曲

①民部稲荷(みんぶいなり)

作詞寺島悦恩・作曲小林範子

民部稲荷(別名相撲稲荷)神社
御祭神 倉稲魂神(うがのみたまのかみ)

一、虹の向(む)こうの八王子

民部(みんぶ)さまのお屋敷(やしき)に
毎晩(まいばん)出(で)かける 小坊主(こぼうしゅ)しんぼち

二、あんなどこお寺(てら)があったかな

それ(それ)でもおし(お)しょうさんはお礼(れい)に
ごち(ごち)そう(そう)い(い)っぱい(い)おもて(お)てなし
民部(みんぶ)さまをおま(お)ね(ね)ぎ

ご利益(りやく)い(い)っぱい(い)民部(みんぶ)さま
ほん(ほん)しん(しん)山(やま)川(がわ)越(こ)へ
ほ(ほ)ち(ち)ま(ま)ん(ん)え(え)ん(ん)ま(ま)ん(ん) き(き)ら(ら)り(り)き(き)ら(ら)り(り)
コン(コン)コン(コン) カ(カ)ップ(ップ)ル(ル)ご(ご)成(成)婚(婚)

三、民部(みんぶ)さまはごきげん

ひとつ相撲(すもう)でも(でも)と(と)ろ(ろ)う(う)かな
強(たか)かった(かった)あ(あ)ら(ら)勝(か)った(った)
また(また)勝(か)った(った)民部(みんぶ)さま
四(よ)、い(い)ち(ち)よ(よ)う(う)の(の)下(した)の(の)民部(みんぶ)さま
い(い)ち(ち)よ(よ)う(う)の(の)葉(は)っぱ(ぱ)も(も)き(き)ら(ら)き(き)ら(ら)
大(だい)判(はん)小(せう)判(はん)も(も)き(き)ら(ら)っ(っ)き(き)ら(ら)
花(はな)手(て)水(みづ)(は(は)な(な)ち(ち)よ(よ)う(う)ず(ず))に(に)は(は)て(て)ま(ま)り(り)花(はな)

ご利益(りやく)い(い)や(や)く(く)い(い)っぱい(い)民部(みんぶ)さま
ほん(ほん)しん(しん)山(やま)川(がわ)越(こ)へ
ほ(ほ)ち(ち)ま(ま)ん(ん)え(え)ん(ん)ま(ま)ん(ん) き(き)ら(ら)り(り)き(き)ら(ら)り(り)
コン(コン)コン(コン)カ(カ)ップ(ップ)ル(ル)ご(ご)成(成)婚(婚)
(くりかえし)

②河童(かどう)の伊勢(いせ)まいり

作詞柿沼宏・作曲小林範子

川(か)越(こ)市(し)伊(い)勢(せ)原(げん)町(まち)「御(ご)伊(い)勢(せ)塚(づか)公(こう)園(えん)」に(に)河(か)童(どう)
伝(でん)説(せつ)に(に)ち(ち)な(な)ん(なん)だ(だ)河(か)童(どう)の(の)モ(モ)ニ(ニ)ユ(ユ)メ(メ)ン(ン)ト(ト)が(が)。

一、カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ)カ(カ)バ(バ)ア(ア)

カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ)カ(カ)バ(バ)ア(ア)
(三(さん)部(ぶ)輪(りん)唱(てい) くりかえし)

お(お)い(い)ら(ら)は(は)小(せう)畔(はん)(こ(こ)あ(あ)ぜ)の(の)小(せう)次(じ)郎(らう)
河(か)童(どう) い(い)た(た)ず(ず)ら(ら)好(この)き(き)の(の)川(がわ)の(の)主(ぬし)
仲(な)よ(よ)し(し)こ(こ)よ(よ)し(し)の(の) 三(さん)匹(びつ)で(で)
お(お)伊(い)勢(せ)ま(ま)い(い)り(り)と(と)し(し)や(や)れ(れ)こ(こ)ん(ん)だ(だ)
カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ)カ(カ)バ(バ)ア(ア)
カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ)カ(カ)バ(バ)ア(ア)
カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ) カ(カ)ッ(ッ)パ(パ)カ(カ)バ(バ)ア(ア)

③Mr.ス(スイ)ー(ト)ポ(ポ)テ(ト)

作詞/作曲小林範子

一、Mr.ス(スイ)ー(ト)ポ(ポ)テ(ト)
ほ(ほ)く(く)は(は)さ(さ)つ(つ)ま(ま)い(い)も(も)
南(なん)の(の)国(こく) か(か)ら(ら) や(や)っ(っ)て(て)き(き)た(た)
食(た)べ(べ)も(も)の(の) 王(わう)様(ぎやう)
江(え)戸(と)の(の)飢(い)饉(げん)に(に)も(も) 大(だい)活(か)躍(やく)
安(やす)く(く)て(て)う(う)ま(ま)い(い)
フ(フ)ァ(ァ)ース(ース)ト(ト)フ(フ)ォ(ォ)ード(ード)
ベ(ベ)ニ(ニ)ア(ア)カ(カ) ベ(ベ)ニ(ニ)は(は)る(る)か(か)
シ(シ)ルク(ルク)ス(ス)ウ(ウ)ィ(ィ)ー(ィ)ト(ト)
み(み)ん(ん)な(な)兄(あ)弟(てい)
Mr.ス(スイ)ー(ト)ポ(ポ)テ(ト)
い(い)ま(ま)は(は)「ト(ト)キ(キ)モ(モ)」
栗(り)よ(よ)り(り)う(う)ま(ま)い(い) 1(いち)3(さん)里(り)
With huffing and Puffing
Please try one! Try One!

6. 虹(にじ)の玻(は)璃(り)(ち(ち)き(き)ゅう)

作詞寺島悦恩・作曲小林範子

一、時(とき)は(は)止(と)ま(ま)った(た) 人(ひと)影(かげ)も(も)凍(こ)る(る)街(まち)
嘆(なげ)き(き)の(の)星(ほし)
The earth can be beautiful again
吹(ふ)き(き)す(す)さ(さ)ぶ(ぶ)風(かぜ)に(に)
舞(ま)い(い)散(ち)る(る)灰(はい)色(いろ)の(の)雪(ゆき) と(と)も(も)し(し)び(び)の(の)森(もり)
The earth can be beautiful again
か(か)ろ(ろ)や(や)か(か)に(に)鳥(とり)が(が) 笑(わ)い(い)か(か)け(け)る(る)花(はな)
輝(かが)ける(る)森(もり)が(が) 語(かた)り(り)か(か)け(け)る(る)朝(あ)す(す)
二、オリ(オリ)オン(オン)遙(は)かに(に)
よ(よ)み(み)が(が)え(え)れ(れ)夢(ゆめ)の(の)星(ほし)
虹(にじ)の(の)玻(は)璃(り)(ち(ち)き(き)ゅう)
The earth can be beautiful again

青い空と

水と風のふるさと 天の箱舟

The earth can be beautiful again

かろやかに鳥が 笑いかける花

輝ける森が 語りかける朝

7. 夕焼け小焼け

作詞中村雨紅・作曲草川信

- 一、ゆうやけこやけで ひがくれて
やまのおてらの かねがなる
おててつないで みなかえろ
からすといっしょにかえりましょう
- 二、こどもがかえった あとからは
まるいおおきな おつきさま
ことがゆめを みるころは
そらにはきらきら きんのほし

8. あんたがたどこさ わらべうた

熊本市の船場・洗馬?それとも埼玉県
川越市の仙波山?(現在の日枝神社古墳付
近?)仙波山には徳川家康公を祀った仙波
東照宮が。徳川家康は「狸」の俗称でも
知られている・・・。

あんたがたどこさ 肥後さ

肥後どこさ 熊本さ

熊本どこさ 船場(せんば)さ

船場山には 狸がおってさ

それを獵師が 鉄砲で撃ってさ

煮てさ 焼いてさ 食ってさ

それを木の葉で ちよいとかぶせ

9. まっかな秋

作詞薩摩忠・作曲小林秀雄

- 一、まっかだな まっかだな
ツタの葉っぱが まっかだな
もみじの葉っぱもまっかだな
沈む 夕日に てらされて
まっかなほつべたの 君と僕
まっかな秋に かこまれている
- 二、まっかだな まっかだな
カラス瓜って まっかだな
とんぼのせなかも
まっかだな
夕焼雲を ゆびさして
まっかなほつべたの 君と僕
まっかな秋によびかけている
- 三、まっかだな まっかだな
ヒガン花って まっかだな
遠くのたき火も まっかだな
お宮の 鳥居を くぐりぬけ
まっかなほつべたの 君と僕
まっかな秋をたずねてまわる

10. ふるさと

作詞高野辰之・作曲岡野貞一

- 一、兔追いしかの山 小鯛釣りしかの川
夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷
- 二、如何にいます父母 恙なしや友がき
雨に風につけても 思いいずる故郷
- 三、こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷 水は清き故郷

